Osaka University Knowledge Archive

Title	近代の超克とポスト・モダンのパラドックス
Author(s)	前田, 雅司
Citation	年報人間科学. 2008, 29-2, p. 25-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12099
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

近代の超克とポスト・モダンのパラドックス

前田　雅司

〈要旨〉

ポスト・モダン思想は、近代（モダン）という言説性＝物語性によって構成されてきた理性や合理性、進歩的史観を疑問に付し、その根拠を問うことで内在的な批判を行ってきた。だが、そうした視点が一見相対主義、保守的な思想性として捉えられると共に、差異性や多様性、異種混交性といったポスト・モダン的な言説そのものが、本来の意図とは捩れた形で、資本主義システム、その生権力に取り込まれる事態に陥っている。

本論では、そうしたポスト・モダン思想に内在するパラドックスを通じて捉え直しを図っていく。先ず、近代を支えてきた信念やイデオロギー等の「大きな物語」の失効を通じてポスト・モダンを位置付けたジャン＝フランソワ・リオタールを採り上げる。だが、リオタール自身は、単純にポスト・モダンを新たな社会の到来と見なすだけでなく、近代という枠内における書き直し＝変化としても捉える二律背反的な面があることを押さえていく。また、「大きな物語」の失効そのものがひとつの「大きな物語」として流通してしまっている面がある。次いで、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリにおける欲望する諸機械と欲望のパラドックスを、また、ジャック・デリダにおける脱構築と否定神学を通じて、ポスト・モダン的なるものが、近代を逆説的な形で補完してしまう内在的な矛盾を抱えていることを捉え直す。そして、以上の視点から、ミシェル・フーコーによる規律社会からドゥルーズが捉える管理社会への移行を視野におさめるながら、近代化の根拠を問題にする、その問い自体が循環して近代化の問題で戻ってしまうポスト・モダン思想の実体を明らかにする。

キーワード

近代、ポスト・モダン、大きな物語、欲望する諸機械、脱構築

1．ポスト・モダンとは

理性＝ロゴスを主体にして成り立ってきたともいえる近代（モダン）は、その超越的な象徴秩序としての言説性＝物語性からはみ出し、あるいは零れ落ちざるを得なかった自然性や身体性／身体的なるもの等を合理的な進歩的史観を阻害する非理性的＝非合理的なるものとして抑圧し、排除することによって、主体―客体、主観―客観という二項図式を形成することで安定した近代社会を構成してきたといえる。

そして、そのような近代というイデオロギー的構造、それに伴う理性的な人間＝超越的かつ単一的な主体性によって形成される自由、平等等といった普遍的な言説性＝物語性そのものに対して、ポスト・モダン思想／ポスト・モダニズムは、その根拠を問うようになって久しい状況にあるといわざるを得ない。フランスのポスト構造主義によって代表されるポスト・モダン思想は、近代という構造の無根拠性を問いただすことによって、これまで抑圧・排除されてきた身体性／身体的なるもの等、余剰＝残余として顧みられることのなかった非理性的なるものを新たに位置付けし直すと共に、差異性や多様性、異種混交性（ハイブリッド）等の概念を導入することによって内在的な批判を行ってきた。そこには、従来のマルクス主義とは異なる形で、ある種近代の超克を図ろうとした部分があったことを見逃すわけにはいかない。

日本においても、ポスト・モダン思想は、一九八〇年代から九十年代初めにかけて、フランスのポスト構造主義を通じて受容され、ニュー・アカデミズム（ニュー・アカ）という敬称によって思想的な傾向を醸成していくことになった。その際、差異の戯れやスキゾとパラノといった思想性が消費社会を牽引する言説性＝物語性として注目され、表層的な記号＝モノの消費、シミュラークルによるハイパー・リアル社会を根拠付ける概念であるかのように受け取られていったといえよう。そうしたニュー・アカデミズムの思想的な軽やかさ――ある面空虚さや軽薄さの裏返しとして――が〔1〕、本来持っていた近代の普遍的原理の根拠を問いかけ、その言説性＝物語性を保留にしていく行為を置き去りにした形で、安易に消費社会の豊かさと重厚長大から軽薄短小への傾向に結び付けられる一方、差異性や多様性が表層的な形式ながら市場的に常態化していくにつれて、ニュー・アカデミズムの思想性＝物語性は市場原理に回収され、結果的に陳腐化していくこととなった。そして、ニュー・アカデミズムによるポスト・モダン的風潮は、九十年代から始まるバブル経済の崩壊を契機として最終的に退潮していったと見ることができるだろう。その意味では、そうしたニュー・アカデミズムの思想的営為は、日本経済のバブル期における消費中心主義の豊かさと共犯的な関係性を背景にして成り立ちえていたという批判を行うことができるのはないだろうか。

以上のように、日本におけるポスト・モダン思想の受容は、ある面消費社会の進展に囲い込まれる形でなし崩しになりながら、現代

思想としてポスト構造主義の影響が今日まで惰性的に続いているというのが現状であるともいえる。他方、本来のポスト構造主義／ポスト・モダン思想も、あらゆる普遍的原理を疑い、その根拠を問う姿勢が共有されているかのように見え、そこには何か新たな思想的根拠を提示しえる訳ではなく、思想的理念が介在しているのでないため――むしろ、そうした思想的な理念を拒否することで、脱中心化していく方向性が採られるところに特徴があるといえるのだが――、当初から相対主義、ニヒリズム、シニシズム等といった形で批判がなされると共に、人間的な主体性の不在と人間性の断片化による現状肯定的な新保守的な思想として見なされる傾向が強かったといえる。

更に、アラン・ソーカル、ジャン・ブリクモンの『「知」の欺瞞』がそうしたフランスの現代思想／ポスト構造主義が好んで用いる言説が、いかに科学的コンテクストを度外視しながら本来の科学的概念からずらした形で濫用し、誤用したものであるかを告発し、ポスト構造主義／ポスト・モダン思想の批判を行った。それが、科学的言説――しかし、それ自体も普遍的な言説として絶対的な根拠がある訳ではなく、科学的知のパラダイムの転換によって変化していかざるを得ないものであるはずだ――に対するサイエンス・ウォーズとなって、ポスト構造主義／ポスト・モダン思想の逆風を形成し、物議を醸す事態ともなった［Sokal/Bricmont 1998=2000］。だが、事態の発端となったソーカルのパロディ論文そのものも、フランスの知識人等、ポスト構造主義の常套句＝概念を皮肉った形で引用した内容であったとはいえ、そのこと自体が知の戯れ／知の無根拠性をなぞった戯れの戯れ（パロディのパロディ）であったとも見なすことができ、余りにもポスト・モダン的な様相を呈していたと見ざるを得ない面があるが。

しかし、そうした批判がなされるのも、思想・哲学から芸術・建築まで、旧来のマルクス主義的な流れとは異なるあらゆる現代思想のあり方を、消費中心へと市場がシフトしていくし社会状況とを批判的に区別せずに混在させながらポスト・モダン思想／ポスト・モダニズムとして一括りにしてしまったためでもあるといえるのではないだろうか。元来、ポスト構造主義は、言語学者フェルドナン・ド・ソシュールの言語理論を基に無意識の構造性とその関係性を対象にした構造主義が静態的な分析による整合性に止まっていることを批判するから始まったとはいえるが、そこにはあらゆる普遍性を疑う以外、何ら共通するような視点が介在しているものではなかったはずである。すなわち、構造主義以降の様々な思想的動きを単純化し説明するために用いられた括り以外の何者でもなく、それを更にポスト・モダンと結び付けることによって、かえってその多様な面を持つ思想性をわかり難くしている感が強いといわざるを得ない。それが、より一層近代とポスト・モダンとの相違、あるいはその移行という問題を、資本主義システムにおける生産から消費への主軸の移行との関連でどう説明すべきかを明らかにしえなくしているともいえるだろう。むしろ、従来の思想が普遍的な理論を構築し、概念を一般化していったのに比べ、ポスト・モダン／ポスト・モダニ

ズムが厳密に吟味されず、まとまりを欠いたまま、肯定するにしろ否定するにしろ、何か実体的な内実が伴っているかのように言葉だけが思想的状況と社会的状況が混在させながら一人歩きしている感が否めない。

2．近代とポスト・モダン

2―1．ポスト・モダンと「大きな物語」の失効

では、資本主義システムの進展によって成り立ってきたともいえる近代に対して、ポスト・モダン／ポスト・モダニズムとは一体何だったのだろうか。

ポスト・モダン思想が差異性や多様性等の言説を用いることによって明らかにしたのは、近代による普遍性は事後的に暴力的な形で構成されたものに過ぎず、そこには様々な非理性的なものを余剰＝残余として排除し、抑圧する権力関係を隠蔽することによって、近代化の過程が進められてきたことであった。その結果として、これまで非理性的な範疇で周辺性に追いやられていた少数者をその束縛から解放する一助を果たすことになる。こうした理性と非理性の境界が本来曖昧であることを通じて、多様性の視点から差異の政治学が図られるようになり、その対象として女性や民族（エスニシティ）、ゲイ・レズビアン等が新たに見出されていくことになった。だが、こうした近代の理性への批判は、西欧中心主義という普遍性を前提にしたものであり、その裏返しに過ぎないという批判がなされることにもなった(2)。

このようなポスト・モダンを思想的に広く知らしめることに大きく影響を与えたのが(3)、ジャン＝フランソワ・リオタールである。リオタールは、その著作『ポスト・モダンの条件』の中で、人々がそう信じて疑わなかった近代を支えてきた知のあり方や価値が変質し、人々が共有化していた近代社会がメタ・レベルで信頼性、信憑性を失っていくことから、新たな社会状況が起っていることを捉えようとする。

「今日の文化・社会――すなわちポスト・インダストリーの社会、ポスト・モダンの社会――においては、知の正当化についての問いは全く別の言葉によって表さなければならない。大きな物語は、そこに与えられた統一の様態がどのようなものであれ、つまり思弁的物語であれ、解放の物語であれ、その信憑性をすっかり喪失してしまっているのである。」[Lyotard 1979:63=1986:97]

すなわち、リオタールは、資本主義の高度化に伴い現れる近代システムの行き詰まりを捉え、その中から生じてくる社会変化の兆候、来るべき新たな社会の変容としてポスト・モダンを位置付けようとする。つまり、資本主義システムは、外部の異質性を取り込むことで、自らのシステムを再構築し、その限界を遅延させていくメカニズムを備えていたのが、消費社会の進展によりシステムを支え、回収すべき外部の異質性を喪失するようになり、自らの内在的矛盾とその限界性を払拭できなくなっていく。そのため、これまで近代システムを形成してきたメタ言説＝メタ物語としての「大きな物語」

も失効していかざるを得なくなる。そこで捉えられる「大きな物語」とは、近代社会のイデオロギーとして人々が信じて疑わなかった自由や平等の言説、神話的構造、あるいは科学的な言説であったといえよう。リオタールは、そうした統一的、統合的な普遍的「大きな物語」の喪失に社会変化の兆しを、そして多様性と差異性からなるポスト・モダン社会への移行を見出そうとする。

こうしたリオタールのポスト・モダン論と類似する論拠としては、ダニエル・ベルの「脱工業化社会」論が挙げられる。ベルは、大量生産による工業主体の社会から、価値の多元化による知識とサービス中心への社会／情報化社会への移行をイデオロギーの終焉／脱イデオロギー化との関連において捉えようとしたが、これに対して、近代社会を支えた「大きな物語」の失効は、資本主義システム、その消費化・情報化の高度化の中で知のあり方が効率化に従属していかざるを得ない面をリオタールは指摘する。その意味では、リオタールの捉えるポスト・モダンは、単純に新たな社会の到来を予想したものではなく、メタ・レベルにおける知の正当性の喪失と共に、知の効率化とシステムへの従属の進展とが相まって初めて見出される面があることも見逃してはならない。

2―2．ポスト・モダン言説を取り巻く内的矛盾

このような動向をポスト・モダン化の進展と見なすならば、近代を支えてきた「大きな物語」の失効は、これまでその普遍的な言説性に囲い込まれてきた個々の「小さな物語」を様々な欲望として日常に散逸させることになる。そして、そこでむき出しになった生は、近代的な主体、自らの立ち位置としての超越的な支えを失い、反復的な日常の中で空転せざるを得なくなっていく。このためメタ言説の「大きな物語」の失速と比例するかのように、人々は、消費社会の中で、個々の「小さな物語」に基づく差異化と表層的な記号消費の戯れ、そのフェティッシュ化における日常的な出来事性に自己のあり方を見出すしかなくなることを意味するだろう。それ故に、リオタールが望む個々の「小さな物語」が異質性に開かれた形で入れ子構造的に結び付いていく事態には必ずしも至らないことが消費化、情報化の高度化の中で起りえるかもしれないことを留意する必要がある。

それと共に、リオタール自身は、そのようなポスト・モダンの位置付けについてアンビバレントな視点に陥っている面を押さえておく必要があるだろう。一方では、情報化等によるテクノ・サイエンスの発達と効率化の進展は、様々な個々の言語ゲームをもたらし、その結果として新たな社会が到来するかのように言及しながら、他方、ポスト・モダンが近代に後続する新たな時代であるとは位置付けしようとはしない一面が見られることである。それは、例えば、プレとモダン、以前と以後といった「時代区分は、「今」の位置を、すなわちそこから出発して年代上の継起にたいして正当な視野を獲得することができると想定される現在の位置を、不問にしている」[Lyotard 1988=2002:32] と見なし、「今（now）」という出来事性に関する時間感覚において、以下のようなリオタールの言及に見てと

ることができよう。

「モデルニテも前述のポストモデルニテもはっきりと限定された歴史的実体として定義することはできないし、第二のものがいつも第一のものの「後に」やって来るわけではないということである。逆にこう言わなければなりません。モデルニテ、すなわち近代の時間性は本来、それ自身とは別の状態へと自らを越えるための推力を含み持っているという理由で、ポストモデルニテはすでにモデルニテに含まれているのです。ただ自らを越えるだけでなく、ある種の究極的な安定性へと自らを帰着させもします。その安定性とは、たとえばユートピア的な企てがめざすもので、しかし同時に解放という大きな物語に含まれる単純な政治的企画がめざすものでもあります。その成り立ちからして、そして絶えず、モデルニテは自らポストモデルニテをはらんでいるのです。」

[Lyotard 1988=2002:33]

このようにリオタールは、単純にモダンの後に到来する新しい社会をポスト・モダン社会とは見なしているとはいえず、むしろポスト・モダンは、モダンの幾つかの特徴的な出来事の書き直しであり、テクノ・サイエンスによる解放を通じて正当化を図る基礎付けであるとされている。

「ポストモデルニテは新しい時代ではありません。それはモデルニテが我がものと主張するいくつかの特徴の書き直しであり、なによりも、科学と技術による人類全体の解放という企画に、自らの正当性を基礎づけようとするモデルニテの意図の書き直しなのです。しかしこの書き直しは、私が述べたように、ずっと以前からすでにモデルニテ自体のなかで行なわれているものなのです。」

[Lyotard 1988=2002:45~46]

このことからも窺えるように、リオタールは、ポスト・モダンをモダンに対する超克として新たな変革をある面見出しながら、それに反して、そこに近代社会内における正当化の書き直し＝社会変化・社会変容が科学技術の展開とテクノロジーの発達によって基礎付けられるとも捉え直していることになる。このことは、リオタールそのものが、近代とポスト・モダンを巡る言説において二律背反的な立場に陥っていると見なさざるを得ないのではないだろうか。それ故、結果的に、近代の普遍的な言説を支えてきたメタ物語としての「大きな物語」の失効を唱えることによって、ポスト・モダンへの社会変革を捉える視点に大きな揺らぎをもたらすことになるだろう。すなわち、近代による書き直し＝社会変革の結果としてポスト・モダンが捉えられるのなら、そこにはメタ・レベルでの近代における「大きな物語」が何らかの形で変化、変容をきたしながらもその言説性＝物語性を存続し、効果をもたらしているとも見ることができるのであり、それだからこそ近代内におけるポスト・モダンという社会変化を見出すことができるともいえるのである。そのことが、ポスト・モダンという言説そのものを捉えがたいものにしていることは間違いない。それが、現在、一連のリオタールのポスト・モダン論とは乖離した形で内実を伴わない形で言葉そのものが一人歩きしだし、肯定するにしろ否定するにしろ、あたかもひとつの思想的

なまとまりを持った実体的なあり方があるかのように受容され、俗流的なポスト・モダン論／ポスト・モダン思想――差異性や多様性等、本来のポスト・モダン思想／ポスト構造主義に見られる挑発的な思想的営為による試みとは異なる形で――として流通していることこそが問題であるといわざるを得ない。大きな枠組みで語り得ないはずの思想性が、あたかも思想的なまとまりがあるかのように、ポスト構造主義等、既存のマルクス主義と異なる形で展開されている個々の思想的営為をポスト・モダン思想として一派一絡げにまとまった思想的現象として奇妙な形で語られてしまい、更に批判する側もそうした状況に吟味せずに絡め取られてしまっているところに(4)、混迷度を深める要因となっていると考えられる。

そして、何よりもの逆説なのは、リオタールが捉える「大きな物語」の失効という見方そのものが、形骸的な形で受容され、皮相な内容としてポスト・モダンを説明する「大きな物語」として流通してしまっていることである――その典型的な例が、差異の戯れとその多様性を称揚し、消費社会に囲い込まれた日本におけるニュー・アカデミズムであることはいうまでもないだろう――。そこには「大きな物語」の喪失」の物語がメタ言説＝メタ物語として成り立ってしまっているといえることになる。すなわち、近代の「大きな物語」の失効を見出すこと事態が、未だ近代のメタ言説＝メタ物語における内在的な言説＝物語として留まっているということにもなり、「「大きな物語」の喪失」の更なる喪失という形で無限に循環し、後退することになってしまう。その意味では、近代はポスト・モダンによって乗り越えられるべきものとして位置付けられながら、逆にポスト・モダンそのものがモダンを前提にしていることにもなるし、また、そうした近代の変容がポスト・モダンへの移行に結び付けられることによって、結果的に近代をメタ・レベルで支えていたともいえる進歩的史観――あるいはマルクス主義的にいえば唯物史観――がポスト・モダン的言説＝物語を支える形で予定調和的に語られてしまってもいることになる。このことは、近代のメタ物語＝「大きな物語」を構成する一因としてその根拠が問われた進歩的史観に逆転した形でポスト・モダンの言説＝物語を支える形で舞い戻ってしまっていることを意味するだろう。

他方、ポスト・モダンという言葉を強調すればする程、そこには単線的な時間軸としてプレ・モダンから近代、そしてポスト・モダンへという歴史的な社会変化の流れとして浮かび上がってくることにもなる。そのような歴史的変化の視点から見れば、ポスト・モダンが近代において流通していた「大きな物語」の失効を前提にして成り立つものとするなら、近代もプレ・モダンにおける「大きな物語」の失効による社会変化の結果の上に移行した時代ということになるだろう。そのようなプレ・モダンを中世社会と見るなら、その社会で流通する「大きな物語」とは、キリスト教による宗教的世界観に基づく伝統的な共同体社会によるものであると位置付けることができる。そして、そのような中世の伝統的社会の言説性＝物語性を超克した形で立ち現れてくるのが、理性的な人間観＝主体性に基づく近代の言説性＝物語性ということになる。その意味では、「大

きな物語」の問題とは、時代の変革において、前時代を構成したメタ言説＝メタ物語がその信憑性を失い、新たな時代におけるメタ言説＝メタ物語に取って代わられることになってくる。それでは、近代の「大きな物語」の失効に対して、ポスト・モダンは、それに代わりうる新しい「大きな物語」を提示し得たのだろうか。むしろ、「大きな物語」を提示するのではなく、その根拠を疑い、個々の「小さな物語」によって織り成される特異性の強度に力点が移っているのが、ポスト・モダンのメタ言説＝メタ物語といえるかもしれない。そのこと自体がある意味「大きな物語」であるともいえるが、普遍的な軸となるメタ・レベルでの「大きな物語」が成り立ち得ない以上、必然的にポスト・モダン社会は、個々の主体が断片化された不安定かつ流動的な社会として立ち現れざるを得ないことを、どう評価するかが問題となってくるとも考えられる。

3．ポスト構造主義／ポスト・モダン思想の陥穽

以上のように、リオタールは近代を構成していたメタ言説＝メタ物語としての「大きな物語」を否定することでポスト・モダンを捉えようとしたが、ポスト・モダン思想としては、大きなまとまった形を取ったものではなく、ポスト構造主義といわれる思潮は、フランスにおける五月革命を共通体験としながら、あらゆる普遍性を疑うことを共通の基盤にしているに過ぎないといえる。だが、差異性や多様性、異種混交性といったポスト・モダン的な言説そのものが奇妙な形で流通してしまい、本来の意図とは捩れた形で、消費化・情報化を通じて変容していく資本主義システム、その生権力的実相に取り込まれる事態に陥っているところに問題があるといえるだろう。以下、差異化＝微分化や多様性、生成性などという視点のどこに内的矛盾があり、近代を補完する形に陥ってしまう面を内在させていたかを、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリにおける欲望する諸機械とジャック・デリダの脱構築を通じて見てみることにする。

3―1．欲望する諸機械と欲望のパラドックス

ドゥルーズとガタリは、従来欠如を補完し、安定をもたらすものとして否定的に位置付けられていた欲望を肯定的に捉え返すことによって、過剰性の視点から位置付けし直そうとする。そこで捉えられるのが欲望する諸機械である。そのことによって、ドゥルーズとガタリは、近代の支配的な構造、すなわち欲望を単一的な形に統合し、統制する資本主義システムの公理系とエディプス・コンプレックスにおける欲望の三角形（父―母―子）の循環的回路を批判的に分析しようとする。そして、そこで捉えられる欲望とは、多様な力動的な生成過程の内において見出され異質なものに開かれた過剰性＝不定形な強度の流れそのものであり、差異化＝微分化を通じて接続と切断を繰り広げる欲望する生産として、欲望する諸機械は、生産の生産、機械と別の機械とが相互に接続と切断を繰り返すことで、自己増殖的に欲望の流れを生成させていくものとされている。すな

わち、欲望する諸機械は、内在的な生産過程において異質なものと結び付きながら生成変化していく過剰なる諸欲望／部分対象として見なされている。更に、それが器官なき身体との関連、そしてスキゾ分析へと結び付けられていくことになる。

「欲望する諸機械は二項機械であり、二項規則《つまり、つながりの体制》の下にある機械である。ひとつの機械は常に他の機械と連結している。生産的綜合《すなわち、生産の生産》は、「これと」et「これの次にある」et puis…という接続的な形態をもって作動する。ということは、ここには常に流れを生産する機械〈と〉et、この機械に接続されてこの流れを切断し採取する働きをするもうひとつの機械〈と〉etが存在するということである。……したがって、二項系列はあらゆる方向に単系的線型状に〔多岐的ではなく〕のびてゆくことになる。〈連続する流れ〉と〈本質的に断片的なまた断片化した部分対象〉との間に、欲望はたえず連結を実現し続けることになる。欲望は流れを起して、みずから流れ、そしてみずから切断するのだ。」［Deleuze/Guattari 1972:11=1986:17］

それ故に、以上のような欲望する諸機械の視点の下に、ドゥルーズとガタリは、異質な要素を取り込みながら無意味＝無方向に生成変化していく不定形な欲望の流れを捉え、何者にも抑圧されない意味で「欲望は革命的である」と評価する。だが、それと共に、そこには大きな欲望のパラドックスがあることも見逃してはいない。

「欲望は、それ自身において、いわば意識することもなく、自分の欲するものを欲することによって革命的なのである。この研究の始めから、われわれは次の二つのことを同時に主張してきている。ひとつは、社会的生産と欲望する生産とは一体をなしているが体制を異にし、したがって生産の社会形態は欲望する生産に対して本質的な抑制を行使するということと、いまひとつはこれと並んで、欲望する生産（「真の」欲望）が、潜在的に社会形態を爆破するものをもっていることとを同時に。」［Deleuze/Guattari 1972:138=1986:147］

過剰な強度に基づく欲望は、いかなる規制を受け付けないと共に、どこに向かうかが誰にも予測、予想がつかないことにもなる。それが、脱コード化としての革命性を持つことになるともいえるが、逆にそれが一定の動機付けを受けると、抑制を欲望する再コード化へと転じる可能性を持っている面を見逃す訳にはいかない。ドゥルーズとガタリは、こうした欲望の両極を、一方はスキゾ的な革命的な流れを備給する欲望する諸機械を、他方はパラノイア的な組織体を備給する技術的社会的諸機械を区別し、欲望のパラドックスを見出しているが、そのパラドックスを解決する手段は提示できないままで終わっている。むしろ、欲望のパラドックスを解消する手段そのものが、欲望の無定型な流れ、その強度を統制、統合することにつながりかねないという意味では、欲望が革命的な過剰性＝強度を持った可能性に接合していくためにも、このパラドックスは解消されないままで保留し続けながら、欲望する諸機械を捉え続けなければならないためであるといえよう。

こうした欲望のパラドックスが如実に現れているのが、今日消費行為を主体によって進められる生の実質的包摂化といえるのではないだろうか。そうした生権力によって進められるのがポスト・モダン化であるとするなら、「大きな物語」という象徴秩序の消失に伴い、「小さな物語」という矮小な世界に断片化、流動化していかざるを得ない状況に追い込まれることとなる。そのような日常が市場化の中に取り込まれ、消費化が日常を覆い尽くしていくことに比例して、個々の日常性＝出来事を通じて構成される「小さな物語」に拠る術しかなくなっていくことを意味する。こうした「大きな物語」の流通が成り立たなくなっていくポスト・モダン状況について、東浩紀は、象徴界の弱体化による想像界と現実界の短絡化として捉えようとする［東 2002:62］。すなわち、父なる超越的な象徴秩序によって支えられてきた日常の安定性が、その失効により不安定にならざるを得なくなっていく。これまで想像界と現実界を仲立ちし、構造化を図ってきた象徴界の解体は、前言語的なフェティシズムとしての想像界と、象徴秩序の残余として抑圧されてきた無意識的な欲動としての現実界を露わにする結果をもたらすこととなり、そのことが断片化、流動化していく「小さな物語」としての身近な日常性と、抑えをなくしてむき出しになった生の強度が奇妙な形で結び付けていくことになる。そのような身近な日常性に自閉していく中で見出されることになるのが、無方向に散逸していく欲望に意味を与えることとなる消費行為ということになる。そのような消費行為は、虚構＝シミュラークルながらも差異性、多様性に基づく自己選択の形をとるため、矮小化、自閉化していく日常に安定的な反復性をもたらすように見え、ますます消費行為が助長される事態がもたらされることとなる。東は、そうした記号＝モノの消費による欲望の充足をアレキサンドレ・コジェーヴに倣い、動物化の進展として位置付けようとする［東 2001:125~141］。こうした動物的な欲望は、自らの選択を通じて形成されるため、そこに関わる生権力的なあり方、その生の包摂化による管理統制が消費者自身が志向したかのような形となって見えにくくなっているという意味で、より巧妙化した欲望のパラドックスにあるといえるのではないだろうか。

3―2．脱構築と否定神学

デリダが唱える脱構築は、単なる再構築というものではなく、現前に基づく近代形而上学を内部から批判し、その根拠性を問うことを目指す思想的営為であるといえるだろう。それ故、脱構築においては、社会の構築によってはみ出し、抜け落ちていく残余／余剰性がいかに隠蔽され、あるいは痕跡としての他者性／他なるものがどのように抑圧・排除されたのかを明らかにすることにより、その社会構築の根拠を疑問に付すことが図られると共に、そうした社会構築そのものを完結するこのない差異化＝遅延化の過程の中に留保することにより、絶えざる差異＝ずれを生じる決定不可能性あるいは余剰性へとつなげていくことであるといえよう。

だが、そうした脱構築が目指す方向性の内に、完結することのない差延化（差異化＝遅延化）の流れの中で見出される他者性が超越

的な他者として立ち現れ、逆にその超越的な他者性が新たな根拠となって全てを回収する中心点になりかねないことを見逃す訳にはいかない。すなわち、脱構築という行為そのものが、ひとつの超越的な身振りとしてフェティシュ化してしまい、一義的な意味作用の下に特権的な視点に立ってしまいかねない要因をはらんでいるということである。

こうした脱構築は、超越的な視点に立った否定のための否定、すなわち否定神学と見なされ、批判が当初からなされてきた。このような単なる否定神学として脱構築が捉えられることは、デリダの意図せざるものであるし、当然デリダ自身も脱構築を否定神学であるとは認めてはいない。脱構築は、いわゆる再構築ではないことはいうまでもなく、決定不可能性という差延化の過程の中に反復とずれの可能性を見出し、意味を散種／散逸させていく生成性そのものであるとするなら、そこには否定神学という単一的な視点が介在する余地等ありえるはずはないのはいうまでもないだろう。

だが、こうした否定神学という批判に対して、あるいは超越的な他者性へと回収されてしまいかねない要素に対して、デリダは脱構築を新たに見直しを図っていかざるを得なくなったのも確かである。その意味では、それ以前からデリダは、脱構築を多義的な形で展開してきたといえるのだが。例えば、東は、前期デリダを否定神学としての脱構築の時期として、そして後期デリダを否定神学批判としての脱構築として捉え、ひとつの転換点があったとみなしているが[5]、確かに、晩年に至るデリダの動向を見ると、大きな変化があったことは否めない事実である。端的には、それは、哲学的形式から文学的表現への移行として現れてきていると捉えることができる。

そこで捉えられる脱構築は、否定神学批判として現れてこざるを得ず、脱構築そのものが固定化した視点に回収されないためにも、脱構築を更に脱構築していく、すなわち脱構築そのものを留保させ、自己完結することのない差延化の過程の中に宙吊りにすることであるといえるだろう。そこにおいて、初めて社会が構築され、ある出来事が生起する直前の余剰性の問題が、単なる他者論という定型化された枠組みとしてではなく、脱構築という行為において浮かび上がってこざるを得ないことになる。すなわち、可能性と不可能性との区別を不問にしていく開かれた強度＝来るべき出来事の複数性――デリダは、それを応答の不可能性による普遍性において捉え返す――が見直されるともいえるだろう。

4. 未完の言説＝物語としてのポスト・モダン

ポスト・モダン／ポスト・モダニズムの言説として、差異性や多様性、異種混交性等が思想的に流通するようになり、重要な概念として定着するようになったが、そのこと自体が大きな矛盾にさらされることとなる。すなわち、ポスト・モダンの言説性＝物語性が、普遍性や単一性、統合性等といった近代の言説性＝物語性に対する批判的言説として見なされれば見なされる程、そのことそのものが

新たな二項図式に陥り、結果的に普遍的な言語構造として回収されてしまう事態になりかねないことである。

本来、そうしたポスト・モダンの言説は、差異化＝微分化による生成変化、過程＝係争（プロセ）にある主体、差異＝遅延としての差延化といった形で、絶えず言語構造、その構成された構造化＝普遍化に回収される危険性を巧妙に回避しながら、自らの思想の革新性＝運動性を担保していくことに腐心してきたといえる。ドゥルーズとガタリ、デリダを始めとして大局的にまとまった思想的潮流があるとするなら、ポスト・モダン思想は、こうした普遍化に回収される危険性に抗いながら、あるいは危険性を逆手にとって、各々の思想の運動性＝革新性を絶え間なく原―暴力的な痕跡＝他者性に回帰しながら決定不可能性を担保し続けることで、先へ先へと思想の運動性を先延ばしにしていく方法を取り続けていたといえる。

それ故に、デリダが捉える痕跡＝他者性は、痕跡として言説化され、実体的に流通するようになった途端、それは痕跡として成り立ち得ないこととなり、絶え間なく脱構築の脱構築、痕跡の更なる痕跡を追い続ける必要に迫られることとなる。また、ドゥルーズは、結果から原因を捉える俯瞰的＝超越的な視点が介在する可能態（ポッシブル）から、多様性に開かれた差異化＝微分化の生成過程において潜在態（ヴィルチュエル）を反復とズレによる内在性において捉え返すことによって、単線的（リニア）な時間軸による同一的な過程を宙吊りにしていこうとする。その意味では、例えば、差異の戯れ――あるいは、ロラン・バルト的には「テクストの快楽」ということになる――は、ジャック・ラカンの享楽に近いものとして捉える必要がある。単なる欲望の充足に向けての戯れ＝快楽ではなく、死へと向かう不安定性、予見不可能性に開かれていく恐れや苦痛と裏腹の関係の中で見出される快楽の中で初めて位置付けられる、生の肯定と死への投企に開かれた戯れであるといえよう。ドゥルーズとガタリの生成変化やデリダの脱構築は、その個々の出来事性の内でいかなる事態になるかが予見不可能性に開かれていること、それが良い結果となるか悪い結果になるかがわからない、ある意味命がけの生の跳躍＝躍動が関わっていることを見ておかなければならない。それが、単なる記号＝モノの消費による快楽＝戯れに形骸化されていったことこそに問題があるといえるが、そのことそのものにこそ、ポスト・モダン思想が抱え込む危険性の裏返しとして現れてこざるを得ないものであるいえるかもしれない。

だが、こうしたポスト・モダン思想は、果たして最終的にどこを目指しているかが不分明であることも事実である。目標とするべき着地点が不在であることが、ポスト・モダン思想の求心力を良くも悪くも損なうことになっていることは間違いない。言語構造の権力的関係性＝社会的制約性に対して絡め取られることに敏感に反応し抗うが故に、特異性＝単独性の複数性、その横断的な生成性を強調するポスト・モダンの言説性――例えば、ドゥルーズとガタリは、「つねに新たな概念を創造すること、それこそが哲学の目的なのである。」［Deleuze/Guattari 1991:10=1997:10］という――の行き着く先は、最終的に個々の個人的言語（イディオム）に至りつくことに

なりかねず、社会的な接点――ソシュールは、それを恣意性の制限において捉えようとした――が見えてこないことにもなりかねない。マルクス主義は、ある意味近代の超克を目指し、最終的目標としてプロレタリアート革命による社会主義、共産主義社会を目指すことによって、イデオロギー的に集約力を持ち得たといえる。そこには、マルクス主義そのものも、本来近代以後の新たな到来するべき社会、すなわちポスト・モダン社会を志向している思想であることは間違いなく、その意味では、ポスト・モダン思想と軌を一にしている面があることを見逃す訳にはいかない。だが、そこに大きな落差があるのは、既存のマルクス主義に比べると、ポスト・モダン思想が、こうしたイデオロギー的な単一的な統合化の功罪を問い、単一的な目的を設定することを宙吊りにすることによって、原―暴力的な強度としての生成性を浮かび上がらせ、そのこと自体を近代の構造性に突きつけることで、その限界を明らかにすることが主たる方法論であるところにある。このことは、一見反近代、脱近代に向けて漸進的に図っているように見えて、全てを宙吊りにしたまま現状の枠組みの中を無限に循環するパラドックスに陥ることにもなりかねないといわざるを得ない。デリダが複数の特異性＝単独性が結び付くことによる「来るべき民主主義」を語っても、ユルゲン・ハーバーマスが近代を啓蒙としての未完のプロジェクト――そこには、啓蒙の弁証法とコミュニケーションによる合意形成が重要になってくる――と見なしていることとは異なり、それが具体的に到来可能なものとしてではなく、いかなる者もその像を予見することができないものとして、その不可能性への可能性に向けて信じることを語るだけにしか過ぎない。東は、こうしたポスト・モダン的な先行きの見えない状況におけるコミュニケーションの不全／ディスコミュニケーションによる空虚性を郵便的不安と位置付ける［東 2002:54~55］。また、ドゥルーズとガタリが欲望する諸機械／欲望する生産との関連で捉える器官なき身体は、潜在的な多様性に開かれた欲望の強度において捉えられる未分化な未完の充実身体であるとはいえ、そこには様々な身体器官に機能分化する以前の潜在態――例えば、それは「ひとつの卵胞」(6)としてイメージされている――がメタレベルで位置付けられていることを見逃してはならない。それが、器官なき身体を実体的に語りえるひとつの根拠に堕してしまう可能性があることを押さえておく必要があるだろう。そうした近代の根拠を問いながら、その問いの中で無限に循環してしまう果てに、結果として近代のメタ言説性＝メタ物語性に舞い戻ってしまうことになりかねないところに、ポスト・モダンが内在する未完の言説性＝物語性を見ざるを得ない。それが、ポスト・モダン思想を保守的な傾向に見せる結果につながっていると考えられる。

5．ポスト・モダンの転回と管理社会

むしろ、ポスト・モダンという思想性＝言説性自体が内包する実体の曖昧さ、思想的にひとつのまとまり等本来持ちえていなかった空虚さは、それぞれの視点に立った個々の論者が感じていた近代の

質的変化、社会変容を共有化しながら、その実体的な像を言い表しえないままであるが故であるともいえるが、それが、新自由主義体制によるグローバリゼーションの進展によってある面社会的に具体的な形で現れるようになり、その言説性＝物語性の意味を失いつつあるのが現状であるといえるのではないだろうか[7]。ポスト・モダンという言説性＝物語性が持つ挑発性といったものが、近代の現状、その具体化＝実体化の進展によって現実のものになり、逆に乗り越えられてしまった部分があることは否めないだろう。

だが、そこで押さえておかなければならないのは、ドゥルーズとガタリ、デリダ達が、「いま―ここ」という過程＝係争（プロセ）という視点から今現在という社会の変質性――それが、資本主義による生権力の問題ということになる――を捉え、近代のあり方、そのメタ言説＝メタ物語の根拠を問う以外の何者でもないのであり、新たな来るべき社会を志向していた訳ではないことである。それを根本的に取り違え、良し悪しは問わず、ポスト・モダンという言葉に引きずられて、彼らの思想的立ち位置を見損なってしまっているところが、大きな誤解と混迷を生じさせている根源であるといえるのではないか[8]。

そして、その先の問題として浮上してくるのが、ミシェル・フーコーによるパノプティコン型の規律社会から、ドゥルーズが「開放環境における休みなき管理の形態」［Deleuze 1990:237=1992:289］と捉える管理社会への移行である。規律社会では、学校等を通じて規律を内面化することによって社会の統合が図られることになるのに対して、管理社会では、超越的な規範が人々を統制するのではなく、生活全体を遍在的なユビキタス・ネットワーク／メディア環境に囲い込み、消費化＝情報化による生の実質的包摂を図る生権力の問題が浮かび上がってくることになる。だが、そうした管理社会は、上から統合、統制する垂直的なものではなく、むしろ安全やセキュリティといった視点から社会の安定性を図り、開放性に満ちた日常環境の利便性を向上させていく形態を取ることから、多くの人々がその恩恵を受ける面があることを見ておかなければならない。それ故に、日常の平常性から外れる者は、例外者として厳しく排除されることにもなる。このことは、ある意味「大きな物語」の喪失による先行きの見えない閉塞的な状況の中で、「いま―ここ」という自閉的な個々の「小さな物語」、その反復的な日常性の安全、安定を保障することが、統制、統合への欲望に容易に結び付けられていくためであるといえよう。そうした統合、統制への欲望に裏打ちされた生権力による管理社会に対して、ポスト・モダン思想は、その予見不可能性故の差異化＝微分化、多様化の可能性をどう対応させていくかが問われることになる。むしろ、「大きな物語」の失効に伴う「小さな物語」の拡散とポスト・モダンの予見不可能性が奇妙な形で補完し合い、反復的な日常性が繰り延べされていくことを肯定的に語ってしまうことさえもできるのである。その意味では、ポスト・モダン思想は、近代の根拠を問いながら、その問い自体が循環して近代の言説に舞い戻ってしまうともいえ、近代化論の域を超え出るものでないところに落ち着いてしまうところに、ポスト・モダ

ンのパラドックスを押さえて置く必要がある。

注

(1) こうしたニュー・アカデミズムの思想的風潮を典型的に表していたのは、「シラケつつノル」という姿勢であったといえるだろう。

(2) デリダを始めとして、ポスト・モダン思想を西欧中心主義として批判した思想家としては、デリダの著作の英訳を行ったガヤトリ・C・スピヴァックが挙げられる。だが、そのスピヴァック自身も、デリダによって「メシアニズムなきメシア的なもの」の視点から批判されることとなる。

(3) ポスト・モダンを流通させた人物のひとりとしてチャールズ・ジェンクスを挙げることができるだろう。ジェンクスは、その著作『ポスト・モダニズムの建築言語』(『A+U一九七八年一〇月臨時増刊号』)において新たな形でポスト・モダン建築を定義しようとした。従来の近代建築が部分と全体を調和させ、機能性を配慮した建築様式であるとするなら、そこで捉えられるポスト・モダン建築は、近代建築の解体を目指して、部分と全体の調和性をなし崩しにした形で、様々な新旧の様式を異種混合化する折衷主義から成り立つ脱中心的な様式ならざる様式とされている。

(4) 例えば、テリー・イーグルトンは、マルクス主義左派の立場からポスト・モダン/ポスト・モダニズムを新保守主義として批判するが、そこには自らの思想性とは異なり対立するあらゆる現代思想を安易にポスト・モダン思想として一括りにする傾向が見られ、その未整理な視点が逆に思想的現状を見え難くしている。[Eagleton 1996=1998]

(5) 東は、デリダを前期と後期とに分け、前期を存在論的脱構築として、後期を郵便的脱構築として位置付ける。そこで捉えられる存在論的脱構築は、不可能なものの単数的表現として、また、郵便的脱構築は、不可能なものの複数的表現として捉えられている。[東 1998:294~295]

(6) ドゥルーズとガタリは、「ひとつの卵胞」について、次のように述べている。「器官なき身体はひとつの卵胞である。そこには、軸線と閾線が、緯度、経度、測地線が縦横に走っている。また生成や移行を印づけるグラジエントが、つまり生成移行して発展するものの行先を印づけるグラジエンドが縦横に走っている。ここにあるものは、何ひとつなにかを表象しているものではない。ここでは、一切が生きており、また一切が生きられ体験されている。」[Deleuze/Guattari 1972:26=1986:33]。今日、バイオテクノロジーの発達は、万能細胞という形で、ある意味器官なき身体を現実化させつつある。万能細胞は、機能分化以前の細胞で、あらゆる機能要素を兼ね備えながら、未だいかなる機能を備えていない状態にあり、それに一定の刺戟を与えることによって様々な臓器に機能分化させ培養させていくことが可能であるとされている。このことは、ある意味再生医療や遺伝子操作の市場化に器官なき身体=万能細胞が組み込まれることを意味するが、この事態をドゥルーズとガタリは資本主義批判の視点からどう捉えるのであろうか。

(7) 今日進展するグローバリゼーションの問題について、ガタリは、一九七〇年代末に統合的資本主義として先駆的な視点を展開している。だが、当時は、未だ東欧社会主義諸国が健在であり、資本主義そして/あるいは社会主義体制に対して、資本の記号化による世界的ネットワーク・システムとして統合的資本主義が捉えられ、現状との時代背景の相違が見てとれる。[Guattari 1977=1988:75]

(8) ウルリッヒ・ベックやアンソニー・ギデンズ等は、ポスト・モダンに対して、批判的に第二の近代として再帰的近代化を定義し、再帰的な過程を通じて近代化のダイナミズムとその変容を捉えようとする。だが、そうした視点は、社会の変容においてポスト・モダン思想と本来相通じ合うものがあったはずであるが、それが、近代からポスト・モ

ダンへの移行という形で単純化されて受容されてしまったため、その関連が見え難くなっていると考えられる。むしろ、ポスト・モダン、あるいは再帰的近代化として現在進行形の社会変化の内実が問うことからはじめる必要がある。

《引用参考文献》

東浩紀『存在論的、郵便的―ジャック・デリダについて―』新潮社、1998年

東浩紀『動物化するポストモダン―オタクから見た日本社会―』講談社、2001年

東浩紀『郵便的不安たち#』朝日新聞社、2002年

稲葉振一郎『モダンのクールダウン』NTT出版、2006年

Beck, Ulrich/Giddens, Anthony/Lash, Scott, 1994, *Reflexive Modernization*, Polity Press（ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、スコット・ラッシュ『再帰的近代化』松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳、而立書房、1997年）

岡本裕一朗『ポストモダンの思想的根拠―9・11と管理社会―』ナカニシヤ出版、2005年

厚東洋輔『モダニティの社会学―ポストモダンからグローバリゼーションへ―』ミネルヴァ書房、2006年

Deleuze, Gilles/Guattari,Félix,1972, *L'Anti-Œdipe*, Les Éditions de Minut（ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳、河出書房新社、1986年）

Deleuze, Gilles/Guattari, Félix, 1980, *Mille Plateaux*, Les Éditions de Minut（ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー』宇野邦一他訳、河出書房新社、1994年）

Deleuze, Gilles/Guattari, Félix,1991, *QU'EST-CE QUE LA PHILOSOPHIE?*, Les Éditions de Minut（ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』財津理訳、河出書房新社、1997年）

Deleuze, Gilles, 1990, *Pourparlers*, Les Éditions de Minut（ジル・ドゥルーズ『記号と事件』宮林寛訳、河出書房新社、1992年）

Derrida, Jacques, 1993, *Sauf le nom*, Éditions Galilée（ジャック・デリダ『名を救う―否定神学をめぐる複数の声―』小林康夫、西山雄二訳、未来社、2005年）

Derrida, Jacques, 1993, *Spectres de Marx*, Éditions Galilée（ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳、藤原書店、2007年）

Derrida, Jacques, 2002, *Marx & Sons*, PUF/Galilée（ジャック・デリダ『マルクスと息子たち』國分功一郎訳、岩波書店、2004年）

Eagleton, Terry, 1996, *The Illusion of Postmodernism*, Blackwell（テリー・イーグルトン『ポストモダニズムの幻想』森田典正訳、大月書店、1998年）

Guattari, Félix,1977, *La Lévolution Moléculaire*, Éditions Recherches（フェリックス・ガタリ『分子革命』杉村昌昭訳、法政大学出版局、1988年）

ユルゲン・ハーバーマス『近代　未完のプロジェクト』三島憲一編訳、岩波書店、2000年

Lyotard, Jean-François, 1979, *La Condition Postmoderne*, Les Éditions de Minut（ジャン＝フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件』小林康夫訳、書肆風の薔薇（水声社）、1986年）

Lyotard, Jean-François, 1986, *Le Postmoderne Expliqué Aux*, Éditions Galilee（ジャン＝フランソワ・リオタール『こどもたちに語るポストモダン』管啓次郎訳、筑摩書房、1998年）

Lyotard, Jean-François, 1988, *L'INHUMAIN*, Éditions Galilée（ジャン＝フランソワ・リオタール『非人間的なもの―時間についての講和―』篠原資明、上村博、平芳幸浩訳、法政大学出版局、2002年）

Sokal, Alan/Briemont, Jean,1998, *Fashionable Nonsense*, Brockman（アラン・ソーカル、ジャン・ブリクモン『「知」の欺瞞』田崎晴明、大野克嗣、

堀茂樹訳、岩波書店、2000 年）
Bell, Daniel, 1973, *The Coming of Post-Industrial Suciety*, Basick Books（ダニェル・ベル『脱工業社会の到来』内田忠夫他訳、ダイヤモンド社、1975 年）
Frank, Manfred, 1988, *Die, Grenzen der Verständigung*, Suhrkamp Verlag（マンフレート・フランク『ハーバーマスとリタオール』岩崎稔訳、こぶし書房、2005 年）
Jameson, Fredric, 2002, *A Singular Modernity*, Verso（フレドリック・ジェイムソン『近代という不思議』久我和巳、斎藤悦子、滝沢正彦訳、こぶし書房、2005 年）
McGuigan, jim, 1999, *Modernity and Postmodern Culture*, Open Univercity Press（ジム・マグウィガン『モダニティとポストモダン文化』村上恭子訳、彩流社、2000 年）

The Conquest of Modernity and the Paradox of the Post-Modern

Masaji MAEDA

The discursive narrative that compose Post-modern thought and authority questions and critiques reason, rationality and the progressive view of history. However, at the same time, that post-modern discourse of difference, mupltiplicity, and hybridity is itself seen as conservative or relativistic, and can be accused of intentionally falling back into the patterns of the capitalist system and bio-power.

This paper attempts to reconsider this internal paradox of post-modern thought. First, it takes up Jean-Francois Lyotard's nation of the post-modern as the loss of the "grand narrative" of beliefs and ideology that supported modernity. Lyotard did not simply see post-modernity as the coming of a new type of society, he regarded it as the transformation of society within the framework of modernity. That is, Lyotard's story of the loss of the "grand narrative" of modernity is itself part of the circulation of that "grand narrative" and, therefore, self-contradictory.

Next, through Gilles Deleuze and Felix Guattari's nations of desiring-machines and the paradox of desire, as well as Jacques Derrida's deconstruction and denial theology, the paper reconsiders the complementary immanent contradictions of the post-modern. In conclusion, using the perspective established in the preceding discussion, this study explores post-modern ideas which transform Michel Foucault's disciplinary society into the control society defined by Deleuze. Problematizing the foundations of modernity in this way explains how the circulation of questions about those foundations is in fact the basis of post-modern thought and why it keeps returning to the problem of modernity.

Key Words : Modern、Post-Modern、Grand-Narrative、Desiring-Machines、Deconstruction